

18 発達保障の旅路をつづけて五〇年

内田 芳夫よしお
 (社会福祉法人麦の芽福祉社会理事長)



たくさん経験と学びのなかで
 障害福祉の世界へ……………

私は、一九四五年九月に茨城県北部の農山村で生まれました。父は満州で銃弾にあたり負傷しての帰国でしたので、毎年のように足の痛みで通院していました。もし両親が広島や長崎で過ごしていたら、私も被曝していたに違いないと、子ども心に戦争のない平和な社会の訪れを願っていました。また、雨の日もほぼ定時に自転車を押して通る知的障害者に、いつも「げんき？」と声かけをする母の姿は、障害のある方とかかわりの原風景です。小学校や中学校では、赤ちゃんを背負って登校する友あり、障害のある友も一緒の

授業でした。放課後には川でウナギを、山で野うさぎやメジロを捕って、自然との共生の時間がたっぷりとありました。

大学院と助手時代を東北・仙台で過ごしました。ハセン病の方が視力も指先も奪われ、舌先で点字を読む(舌読)姿を見て学びつづけるエネルギーに圧倒され、また、知的障害者施設で「強制不妊手術」がおこなわれていたことに大きな衝撃を受けました。さらに、「びわこ学園」を舞台に制作された療育記録映画「夜明け前の子どもたち」(一九六八年)を見て、発達保障とはなにかを学び、「この子らを世の光に」を最後の言葉に、五四年の生涯を閉じた糸賀一雄の思想に学びつづけるながら、障害児教育・福祉の世界にかかわっていま

す。一九八〇年一〇月に鹿児島大学に赴任し、人生でもっとも長い時間を今、鹿児島島の地で過ごしています。

真の共生社会をめざして……………

全国の作業所を訪ね歩いてきた中村隆司さん(現・麦の芽福祉会専務)と鹿児島大学の清原浩先生(現・福祉生協むぎのめ理事長)との出会いを契機に、全障研鹿児島支部を核とした共同作業所をつくろうという動きと、障害のあるなかまたちの願いを束ねて、一九八二年に「麦の芽共同作業所」の開所に至りました。「障害者が働くなんて、考えられない」という社会の目、差別、偏見が強かった時代のなかでのスタートでした。麦の芽の最初のとりくみは、廃品回収やバザーなどでした。

一九八四年一二月、多くの市民と障害のあるなかまたちの交流を目的に、人生、ゆつくり、のんびり確実に！「福祉の村」ちんたら村」としてバザーを開催。一万五〇〇人が参加して新聞記事にもなり、共生社会やインクルーシブな社会の実現に向けて歩みだす大きな転機となりました。一九八九年、麦の芽福祉会とあすなる福祉会(障害乳幼児の療育相談室)とが合同して法人化にとりくみ、一〇万人署名や募金活動等を

展開し、一九九二年に「社会福祉法人麦の芽福祉会」が誕生。今年四〇周年を迎えました。清原前理事長からバトンを受け、理事長として六年目になりますが、これからも「困ったことに応え続ける組織でありたい」と思います。

なかま、家族、職員と力を合わせて、
 生存権保障と平和を守りたい……………

麦の芽福祉会は、どんなに障害が重いなかまも働ける場を創るといふ揺るがぬ夢とねがいをもちつづける「個」が「孤」にならない生き方と協同・共同の力で創造する本来の福祉のあり方を問いつづけてきました。この間、障害者差別解消法の成立や障害者権利条約の批准などにより、障害者の生活・教育・労働などの権利を確保する方策も一定程度進んできていますが、いっぽうで、基本的人権を脅かす構造は変わらず、制度による営利獲得や人権剥奪が起こり、社会福祉の根幹が揺れ動き生存権保障が危機に瀕しています。

これからも、日本国憲法を守り平和を希求する運動とリンクし、日常の実践と学びを往還させ、麦の芽の原点・ビジョンを醸成するとりくみを、なかま、家族、職員と力を合わせてとりくんでいきます。